

平成23年度第1回

## 企画展

# 山崎山遺跡

## 埼玉県最古の 鍛冶遺構のある遺跡



第5号住居跡出土鉄製品

期間：平成23年4月23日（土）～7月10日（日）

期間中の休館日

4/25

5/2.6.9～12.16.23.30

6/6.13.20.27

7/4

## 宮代町郷土資料館

埼玉県南埼玉郡宮代町西原289

TEL 0480-34-8882

## はじめに

宮代町は、大宮台地の東北部にあり、旧石器時代約2万年前から人々が住んでいました。今日、そうした人々が住んでいたところは遺跡として知られ、発掘調査によって当時の生活の一端が明らかになっています。

山崎山遺跡もその一つで、工場の増築や学校建設、ほ場整備等により数回の発掘調査が行われ、その結果、旧石器時代から縄文時代、古墳時代前期の遺構、遺物が発掘され、それぞれ調査報告書としてまとめられています。ことに平成2年度の調査では、古墳時代前期4世紀後半に位置づけられる鉄の道具を作った鍛冶工房跡が発掘されました。これは、発掘当時は東日本でも非常に少ない鍛冶工房跡として注目され、現在でも数例しか発掘されていない貴重な遺構です。工房跡からは鍛冶炉や鉄器を作る道具、鍛冶滓、そしてこの工房跡で作られた鉄製品が出土しました。また、ほかの住居跡からも小さな鉄製品がまとまって出土しています。

今回の展示では、そうした鍛冶工房跡の出土遺物をはじめ、山崎山遺跡の主な発掘調査の成果をご覧いただきたいと思います。郷土の古代の人々に思いをさせ、また歴史の一端に触れていただければ幸いです。

平成23年4月

宮代町郷土資料館

### 凡例

1. 本書は平成23年4月23日から7月10日まで開催される、宮代町郷土資料館平成23年度第1回企画展「山崎山遺跡」の展示図録です。
2. 展示の企画、図録の執筆、編集は、当館学芸員青木秀雄が担当しました。
3. 本書は、それぞれの調査年度の発掘調査報告書を基に作成しました。詳細は報告書をご覧ください。



山崎山遺跡遠景 昭和57年

# 山崎山遺跡

## 古代鉄器生産の遺跡

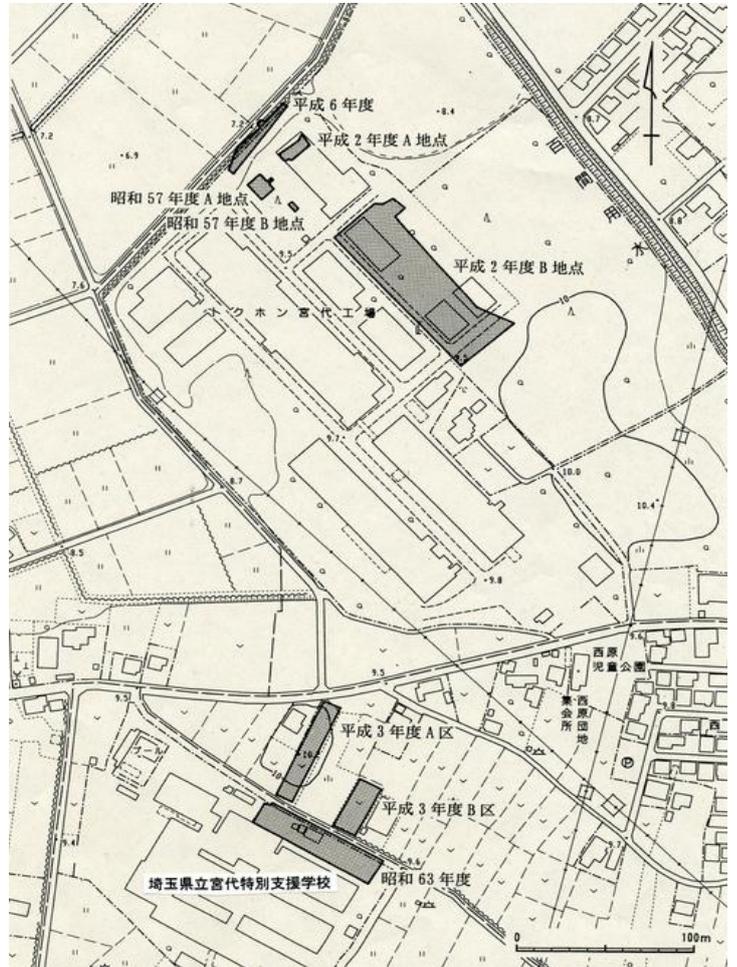
### 山崎山遺跡の概観

宮代町は、地形的には大宮台地東部の慈恩寺支台の縁辺部にあり、古利根川の右岸に位置しています。標高6～11mを測り、台地とその周囲に広がる沖積地、そして古利根川によって形成された自然堤防から成り立っています。古利根川以東は、中川低地という広大な沖積地が広がっています。

山崎山遺跡は、こうした宮代町のほぼ中央部にあり、字山崎を中心として字西原、字金原にかけて広がる遺跡です。遺跡の西側は現在水田となっている低湿地が台地を囲み、北側はかつての笠原沼を望む標高9～10mを測る台地上にあります。

山崎山遺跡の調査は、トクホン工場の増築や埼玉県立宮代養護学校（現埼玉県立宮代特別支援学校）建設、下野田逆井地区ほ場整備事業等により昭和57年度、昭和63年度、平成2年度、平成3年度、平成6年度の5回行われました。それぞれ調査地点は異なりますが、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、近世の遺構、遺物が発掘されました。ことに、平成2年度の調査では、古墳時代前期4世紀後半に鉄の道具を製作した場所である鍛冶工房跡が発掘されました。この頃の鍛冶工房跡は、全国的に見ても少なく、現在、関東地方で古墳時代前期の鍛冶工房跡として確認されているのは、4例程に過ぎません。鍛冶技術が関東地方へ導入される時期のものとして、その実態を知る上で貴重な遺構です。

鍛冶という当時の最先端技術を持ち、さらに第3号住居跡からは大規模な集落に1個体程度しか出土しないという特大の壺が出土しており、こうしたことから山崎山遺跡はこの地域の中心的な集落であったものと思われます。



発掘調査地点



山崎山遺跡遠景(昭和40年代末)

# 旧石器時代

## 段丘上にある旧石器人の足跡

宮代町の旧石器時代の遺跡は、刺突具や切る道具等として使われたナイフ形石器の出土した前原遺跡や金原遺跡、木や骨に埋め込まれて使われた細石刃の出土した逆井遺跡等が知られています。

山崎山遺跡では、昭和 63 年度、平成 6 年度の調査によってナイフ形石器等が発掘されました。

昭和 63 年度の調査では、山崎山遺跡最南端の調査区から 2 点の石器が発掘されました。スクレイパーと呼ばれる物を削ったりする道具と、石の側縁に抉りの刃がつけられた抉入状石器と呼ばれるものが出土しました。

一方、平成 6 年度の調査では標高 7m を測る台地の段丘上で、ナイフ形石器 1 点と剥片数点が発掘されました。これまで、旧石器時代の遺跡は台地の中でも高いところで発見されていましたが、こうした段丘上での発見は町内では初めての例です。



遺物出土状況（昭和 63 年度）



スクレイパー（左）、抉入状石器（右）



調査区遠景（平成 6 年度）



ナイフ形石器（左）、剥片（右）

# 縄文時代

## 広がる後期の集落

縄文時代の遺構、遺物は各調査地点で発掘されています。縄文時代草創期（12,000年前）から後期（3,000年前）にいたる各時期の遺物が出土し、ことに縄文時代後期は、昭和57年度、昭和63年度、平成2年度の調査によって住居跡や土坑等が発掘されています。ここでは、縄文時代後期の主な遺構、遺物を中心に紹介しましょう。

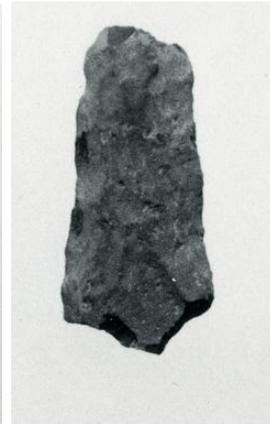
### 縄文時代草創期

昭和63年度の調査の際、周辺から草創期（約12,000年前）の尖頭器2点が表採されています。1点は木葉形をした石器で、もう1点は、おそらく有舌尖頭器と呼ばれる細長い形をしたものと思われます。尖頭器は、槍の先に装着して使われたものと考えられています。平成2年度の調査でも1点出土しています。

なお、前原遺跡では同時代の土器（微隆起線文土器）が出土しています。



木葉形尖頭器



有舌尖頭器



尖頭器

### 縄文時代後期

昭和57年度、昭和63年度、平成2年度の調査によって、縄文時代後期初頭から中葉（約4,000～3,500年前）の住居跡や土器等が発掘されました。また、昭和63年度の調査では町内では数少ない後期後半（約3,000年前）の土器も1点出土しています。

平成2年度の調査では、台地の中ほどから3軒の住居跡や土坑が発掘されました。第7号住居跡は、後期初頭の住居跡で土器や打製石斧、石皿等の石器が出土しました。第4号住居跡、第6号住居跡は、後期前半の遺構で、ことに第4号住居跡は、7m前後を測る円形の大型住居です。住居跡から炭化物や焼け土が多量に発見されたことから、火災で焼失した住居と思われます。また、注口土器と呼ばれる注ぎ口のついた土器が2点出土しました。同じ注口土器でも大きさは倍以上の違いがあり、その用途は異なっていたものと考えられます。



第7号住居跡出土土器



第7号住居跡(縄文時代後期初頭)



第7号住居跡出土土器



第 7 号住居跡出土 打製石斧



第 7 号住居跡出土 石皿



第 4 号住居跡(縄文時代後期前半)



第 4 号住居跡出土 注口土器



第 4 号住居跡出土 注口土器

昭和 57 年度の調査では、台地の北西側の斜面部、標高 9m 前後を測る 152 m<sup>2</sup> の調査範囲から縄文時代の住居跡 5 軒、土坑 3 基が発掘され、それらに伴う土器や石器が出土しました。

縄文時代の住居跡は、縄文時代後期前半の堀之内式と呼ばれる時期の住居跡が 3 軒、後期中葉の加曾利 B 式と呼ばれる時期の住居跡 2 軒が発掘されました。後期前半の住居跡は概ね円形をしており、後期中葉の住居跡は楕円形をしています。また、後期中葉の住居跡は台地の低い位置に造られています。こうした住居跡などから、土器が多数出土しました。ことに、後期中葉の土器は薄手で丁寧な作られたものが目立ちます。第 5 号住居跡からは、同種の高さ 45cm を測る大型の深鉢が出土しています。



調査前の風景



第 1 号住居跡 (縄文時代後期前半)



第 6 号住居跡 (縄文時代後期中葉)



第 5 号住居跡出土土器(縄文時代後期中葉)



第 3 号土坑遺物出土状況 (縄文時代後期中葉)



第 3 号土坑出土土器(縄文時代後期中葉)

昭和 63 年度の調査では、後期前半と後半の土器が出土しています。後期前半の土器では、土製の土器の蓋が出土しました。また後半の土器は、安行式土器と呼ばれるもので、町内では最近道仏北遺跡で出土している程度です。



土器の蓋(縄文時代後期前半)



安行式土器(縄文時代後期後半)

# 古墳時代

## 鍛冶工房のあるムラ

昭和 57 年度、平成 2 年度の調査によって古墳時代の遺構、遺物が発掘されています。昭和 57 年度の調査では、古墳時代前期の住居跡の一部が 1 軒発掘されました。平成 2 年度の調査では、古墳時代前期の鍛冶工房跡 1 軒、古墳時代前期の住居跡 7 軒、同中期の住居跡 1 軒、古墳時代の井戸 1 基、古墳時代の土坑 4 基が発掘され、古墳時代前期の集落の一端が明らかになりました。ことに、鍛冶工房跡は 4 世紀後半の遺構として、数少ない遺構です。このほか鍛冶関連遺構としては、鉄製品がまとまって出土した第 5 号住居跡、鍛冶関係の遺物が出土した井戸等があります。それらの遺構を中心に、見て行きましょう。

### 鍛冶関連遺構

#### 鍛冶工房跡

鍛冶工房跡は、炉で熱した鉄の素材を鍛冶の道具を用い鍛えて製品にする所、つまり鉄器の生産が行われた所です。一辺約 2.5m、深さ約 50cm を測る方形の小型の遺構で、ほぼ中央部に 2 基の鍛冶炉があります。鍛冶炉からは鍛冶滓(鍛冶の過程で生じた鉄の不純物)、滓付着土器片(土器に鉄の不純物が付着したもの)等が出土しています。また、鉄製品も炉内から出土しています。この他、鍛冶の道具として、羽口(ふいごの口)、砥石(石質：砂質頁岩)、ハンマーストーン(石製の槌)、金床石(鍛冶を行う際に用いる石製の台)の破片や軽石、この工房で作られた鉄錐と推定される細い棒状の鉄製品も出土しています。鍛冶滓等の分析によれば、鍛冶は鉾石系鉄素材を用いた本格鍛冶で、鉄器製作(小物類の農具や工具などの製作が想定される)が行われていたことが明らかとなりました。また、鉄の原料は朝鮮半島産と推定されています。

鍛冶の技術は、弥生時代前期末に日本に伝わり、九州地方を中心に行われていました。古墳時代前期 3 世紀後半頃には関東地方に伝えられていたようです。4 世紀半ばから後半には関東地方内陸部等にも広がりを見せています。山崎山遺跡の鍛冶工房は、こうした内陸部へ広がる初期段階に位置します。



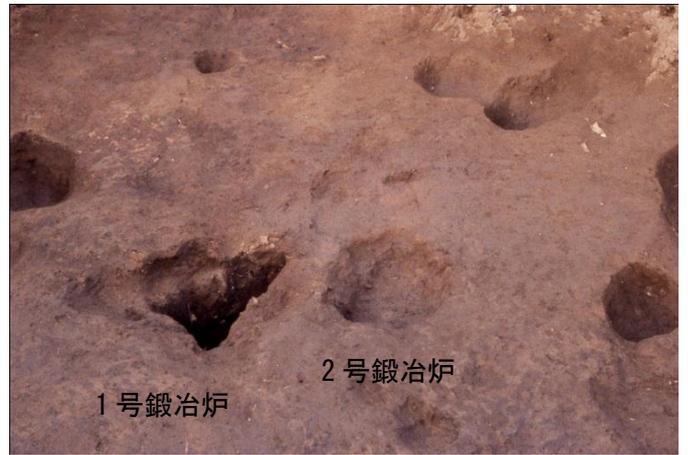
鍛冶工房跡



鍛冶工房跡 発掘風景



鍛冶工房跡 遺物出土状況



鍛冶工房跡 鍛冶炉



鍛冶工房跡 羽口出土状況



鍛冶工房跡 砥石、ハンマーストーン出土状況



鍛冶工房跡 鍛冶滓出土状況



鍛冶工房跡 鉄製品出土状況



鍛冶工房跡出土 鉄製品



鍛冶工房跡 土器出土状況

## 第5号住居跡

4.2m×3.7m、深さ 25 cmを測る長方形をした住居跡です。炉の周辺等から鉄製品 17 点が出土しました。いずれも小さなもので、まとめて廃棄されたものと思われます。金床石の破片も 1 点出土しました。鍛冶工房跡と深い関係がある住居と考えられます。住居の西側の貯蔵穴の直上から、長さ約 5 cmを測る大形の管玉(首飾り)が出土しています。また、北西側の壁直下から土師器の埴が床面に直立し、その上を土師器の底部が覆っているという珍しい形で出土しています。

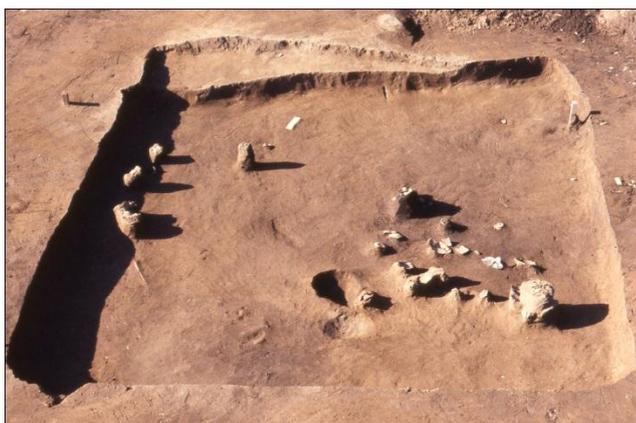
なお、この住居跡の床面は中央部が低く周囲が 1 段高い「ベッド状遺構」という独特の形を持ったもので、こうした形の住居は首長クラスの住まいとも言われています。大型の管玉の出土等を考えるとムラの中心的家であった可能性が高いと言えるでしょう。



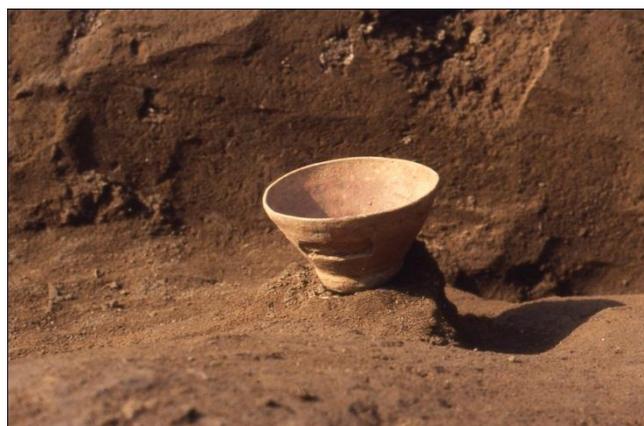
第5号住居跡



第5号住居跡 管玉出土状況



第5号住居跡 遺物出土状況



第5号住居跡 土師器 埴出土状況



第5号住居跡出土 鉄製品



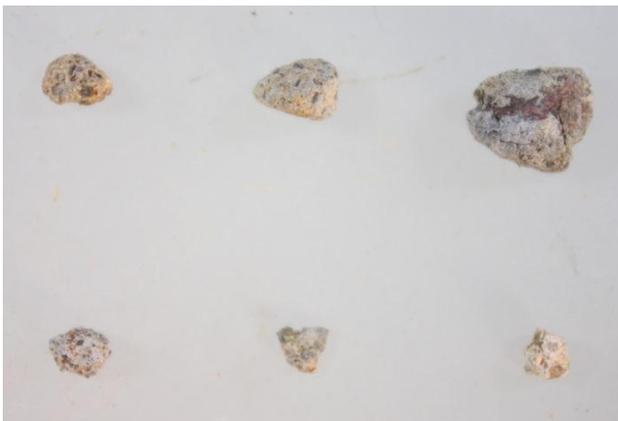
第5号住居跡出土 土師器

## 井戸

直径 2.3m、深さ 2.7m を測る、円形をした大型の井戸です。深さ 1.8m のところでテラス状の段をもち、段のところからさらに 90 cmほどの深さを持つものです。底は 30 cm前後を測る平坦な造りをしています。底付近には、砂質の黒色の土が堆積しており、それらを取り上げ水洗いしたところ、古墳時代前期の小さな土器片とともに、鍛冶関係の被熱した土器片や鍛造剥片がわずかに出土しました。こうしたことから、鍛冶工房に關係する遺構と考えられます。



井戸



井戸出土 被熱土器



井戸出土 鍛造剥片

## 第3号住居跡

古墳時代中期初頭の住居跡です。鍛冶工房等の古墳時代前期に続く時期のもので、同時期のものとしては1軒だけ発掘されました。一部が道路にかかり全体の形は分かりませんが、現況としては5m×4mを測る長方形をした比較的大型の住居跡です。住居の南側に貯蔵穴があり、炉はやや北寄りにあります。この住居跡からは幅4cmを測る棒状の鉄製品が1点出土しました。鍛冶工房跡の棒状鉄製品とは大きさが全く異なっています。

また、この住居跡を中心として第8号住居跡、鍛冶工房跡等から出土した特大の壺があります。このような壺は、一つの集落、それも大規模な集落で1個程度しか出土しない土器です。山崎山遺跡の持つ性格の一端をうかがい知ることができます。



第3号住居跡



第3号住居跡 調査風景



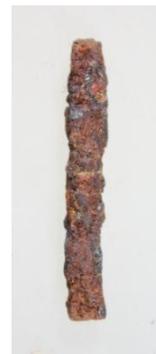
第3号住居跡 遺物出土状況



第3号住居跡 土師器 特大の壺



第3号住居跡出土 土師器 高杯



第3号住居跡 鉄製品

### 古墳時代前期の主な遺構

#### 第10号住居跡

3.4m×3.3mを測る比較的小型の正方形をした住居跡です。この住居跡から、土師器の壺、甕、鉢、高杯等が多量に出土しています。



第10号住居跡



第10号住居跡 遺物出土状況



第10号住居跡出土 土師器